

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十五年一月十五日
第三種郵便物認可
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三六七号)

慈光

第三十二卷 第一号

次

自 督 餘 録 …………… 近角常観 …… (1)

こ こ 路 …………… 福島政雄 …… (6)

菅 瀬 芳 英 和 上 …………… 白井成允 …… (10)

御一代記聞書抄(続・五) …………… 井上善右エ門 …… (13)

自 照 日 誌 抄(16) …………… 西元宗助 …… (16)

——ことしもお宜しく——

念 仏 詩 抄 …………… 木村無相 …… (18)

仏願の生起を聞く …………… 花田正夫 …… (21)

自 督 餘 録

近 角 常 観

母の病氣を見舞ったのを御縁として、我門徒をはじめ近隣の人々にお慈悲を話して、皆々ひときわ気のついた人が多かった。そこで此度は帰京の道すがら、病氣の人々を尋ねて共に御慈悲を喜ばしていただこうと決心した。

先ずわが中学時代からの親友梶井研丸君を尋ねた。同君は二十七、八年間かわらざる断金の友である、今春以来心臓病にかかって静養せられていてと聞いて、尾張の君が寺を訪うた。同君をはじめ一家の方々は非常によろこんで迎えられ、どうこたえてよいのやら分らない、相かえりみて唯感謝の念仏ばかりである。

同君の寺を訪うことはこれで前後五度である。而してその第二度目は懺悔録に書いたわが煩悶中に尋ねた友人は、実に君である。かえりみると今から十五年前、中夏炎天の空に夏草の生え茂った堤を内外身心の熱のために苦しめられつつ、全身に汗して君をたずねた昔が想い出される。そ

たからと云って、おめおめ身をこまぬいて日暮をしてい
るのは何となく気がすぬ心持であるが、如何がであ
うか

とのたずねである。そこで尋ねられた私がかえつて友人に
よつて大いなる教を得た。

如何にもそうであらう、病でない時は、病氣にでもなつたら喜ばれるであらうと思ひ、さて病氣になれば病氣でなかつたなら喜ばれるであらうと思つて、つまりは何時も喜ばれぬのである。喜ぶべき心をおさえてよろこばせざるは煩惱の所為なり、死なざるやらんと心細く覚ゆることも煩惱の所為なり、よくよく煩惱の強盛に候にこそとはこの事である。御同様に病氣になつたら念仏三昧になれるであらうなどと思うのが自分を買いかぶりして居るのじや。しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたがここじや。喜ばうとか、職に斃れねばならぬとかいらぬ心配するよりも、よく見抜いて下された御心に遠慮なく安心させていただくのじや。

かくいたたかして貰うた一念が娑婆のおわり、臨終じや。君、生きて居ると思へばこそ、いらぬ娑婆氣が離れぬのじや、散る時が浮かぶ時なり蓮の花。君、信の一念にすでに一度死んだのじや。いらぬりきみを出すじやない、残余のこの身体は仏様よりあずけられたのじや、大切に養生する

の時の本堂前の蘇鉄もある、道路も昔のままである。山も山、路も昔にかわらねど、かわりはてたる我心かな。

友人は胸中を打明けて話されるには、いよいよ心臓病とわかつた時に、万一のことがあつたならば君によろしく云うてくれ、お蔭で大いに御慈悲を喜ばして貰うて御恩の程がありがたいと申し置きながら、何とやらん君にたずねたいと思つていたのに、わざわざ来てくれたのは嬉しいと云つて、次に申されるには、

歎異抄九章はかねて承知して居るものの、実は病氣にでもなつたらその時こそは何事もさしおいてお念仏も出来るであらう、喜ばれるであらうと思つていたが、事實は正反対である。又自分の信友である村長が村政のために力を尽し椅子によりながら心臓麻痺で其職に斃れた。また清沢満之師が病軀をひっさげて粉骨砕身されたことを考えると、自分の如きは医師から読経も説教も禁止され

のが病人のつとめじや、と申したら、門徒の人が傍から申されるには、如何にも左様であります。たとい平臥にても息さえ通うていて下されば何よりありがたい。ただこのまま御病中にお念仏を喜んで下さるのが何よりの御教導であります、と。

友人にも善知識の御教化をくりかえして共に喜んでもらうた。そして「散るときが浮かぶ時なり蓮の花」の御句は今まで臨終の事とばかり思つて居つたが、この時はじめて前念命終、後念即生の思召であることを悟つた。実に気づきがおそかつた、此度は徹頭徹尾善知識の御教化に一入氣づかせていただき実にありがたい極みである。親の病や、友人の病氣が私へ対してのお知らせと唯々仰ぐばかりである。

次に美濃の土岐津なる丸茂夫人の実母の病氣を見舞うた平素より聞法篤信の人であつた。しかるに此度ははにわかに病氣で本復がむつかしいゆえ、夫人が何よりの親への妙薬をと、私に来て呉れとの希望であつた。又母御も病苦の中から私が来たら来たらと待受けて下さつた。

到着するや否や、何はさておき、病床に臨みて善知識の御教化を取次いでお話をした。そして尾張の友人の病中の所感を話した。ところが母御の申されるには、私も全く同

様です。喜ばれぬ、なぜこの様に邪見になつたであらうとの歎きであつた。そこで前念命終、後念即生のお話をして平生業成のありがたいことを話した。平生業成というのは平生御慈悲をいただいておれば病中でも勇ましく喜べてゆけるといふことではない。たとえ病苦のために喜べずとも平生にいただいておれば、往生一定じやといふことです、それについて歎異抄をとり出して拝読した。曰く、弥陀の光明に照らされまいらする故に、一念發起するとき金剛の信心をたまりぬれば、すでに定聚のくらくにおさめしめたまいて命終すれば、もろもろの煩惱悪障を転じて無生忍をさとらしめたまうなり。……ただし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあゝまた煩惱苦痛せめて正念に住せずして終らんに、念仏申すこと難し、そのあゝの罪はいかにして滅すべきや。罪消えざれば往生はかなうべからざるか、摂取不捨の願をたのみたてまつらばいかなる罪業をおかし、念仏申さずしておわるともすみやかに往生をとぐべし。この章を読みながら初めて気がついたので、命終すれば、の一句である。今までは下の文につけて、命終すればもろもろの煩惱罪障を転じて無生忍をさとらしめたまうなりと読んでいたが、これは誤りであつた。すべて定聚のくらくにおさめしめたまいて命終すれば、であつた。平生一念発

至徳の風静かに、衆禍の波転ず、心配せずとも、ちゃんとよくして下さるのじや。もろ／＼の煩惱罪障を転じて無生忍をさとらしめたまうなり。南無阿弥陀仏、々々々

老母はいつの間にか苦もなく安心された。蓋のとれたようなものじや。もはやただうなづかれるばかりであつた。弘誓の船に乗りぬれば、大悲の風にまかせたり、まるで親に抱かれた赤子の如くなられた。この御縁で、はじめて歎異抄の命終すればの御文まで気づかせて貰うた。観無量寿經の、廓然大悟、得無生忍は韋提夫人の現在身の上じや。喜・悟・信の三忍の味はここじや。それから一週間して病革まつて安らかに往生を遂げられた。

興^V韋提等獲三忍、即証法性之常樂、南無阿弥陀仏。

次いで中泉町に立寄つてまた御同朋の病を尋ね、篤信者佐藤氏の催によつて同地の大谷派説教所で講話をした。同氏の息、清一郎氏は高等工業在学中、常に求道学舎に來聴されたのである。説教所はごくささやかなものであるが、その創立開場式の当時、厳如上人が御孫即当御法主台下とともに越後御巡化の帰途に御臨場せられたとのこと、四畳半に三畳の居間はその時におはいらされた室と承つておぼえず森嚴の感に打たれ、当時私は京都にあつて御出發を

起するときは、はや命終じや、平生の時、善知識の言葉の下に帰命の一念を發得すれば、その時をもつて娑婆の終り臨終とおもうべしと、病床に臨んで讀まして貰うて自分からはじめて気をつけさせてもらった。

病人は随分煩惱苦痛が多いらしい、念仏の申しにくいも無理はない。横川法語に、信心浅きけれども本願ふかきかゆえにたのべばかならず往生す。念仏ものうけれども、称うれば必ず來迎にあずかる、功德莫大なるがゆえに、このゆえに本願にあうことをよろこぶべし、と仰せられたのはここである。

しかるに不思議にも、仏前に声をあげて勤行する間は病惱中にもやすやすと眠られる、休まれる。到着の晩は聞こえるように勤行したが、りん、の聞こえるあいだはまた休まれたとのこと。ア、これを見てもわかる、煩惱にまなこさえられて、摂取の光明見ざれども、大悲ものうきことなく、つねにわが身をてらすなり。大悲の願船に乗じて光明広海にうかびぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。

大悲は船じや、光明は海じや。この病室が願船じや、前裁は光明の海じや。船に乗つたうえは時節さえくれば彼岸に到着することじや。船に乗つたうえは時節さえくれば彼岸に到着することじや、大悲の願船には清淨の信心を順風とするのじや、

お見送り申したことを思い出して追憶の情やみがたいものがあつた。

嗚呼考え来れば此四月に四国の御駐錫伝道より引続き一旦江州へ歸つて、母を伴つて京都に上り、厳如上人十七回忌の法要に参詣して、母は親しく盛儀を拝して感泣止みみたく満足され、私もその盛儀を拝し、また御満座の、

如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も、骨をくだきても謝すべしの御和讃を拝聴して感泣やみがたかつた。

翌日御親教を拝聴し、引続き母とともに大門の上棟式を拝して、あだかも今より三十四年前、私が父に連れられて得度に上京した時、丁度この門の上に安置せられた厳如上人御真作の三寶仏の開眼式のあつたことを想ひ出し、壇林宝座より上人の御宿願の実現されたのを御覽なさるる御満足^今を仰がずには居られなかつた。

特に翌日、光養磨殿の御礼始めは、將來われら及び子孫が御教化を蒙るべき有縁の善知識にてもしますことを思うて感謝やみがたかつた。母の満足たとうるにものなし。大^今学寮講堂において真の知識の題にて祝賀演説をなし、且つ各地の御同朋に遇い、特に石見の木村師御夫妻はわざわざ東京にお出でであつたが、京都にて度々お目にかかつた。

感謝と満足とをもって母と共に出立し、暉峻洪範君は私と同車して錦織寺の御法主にお遇いに行くとして野州にて下車、私は母と別れて大垣に下りた。あたかも東宮殿下が演習地へ御出向のため乗車せられた。京都から帰りの同行がア、親様から親様へ、有難い有難いと感泣して居る。そして私の顔を見て、近角先生でございませうかと挨拶する、その人達は美濃の高須の有縁の御同行であった。その汽車が発車すると、豈はからんやその汽車に錦織寺御法主猊下がお乗りになった。

私はかねて昨年以来度々招きを受けていた美濃笠郷村の専了寺に参り二日間講話した。同住職は全く名聞を離れて御慈悲を喜ばれる方である。「如来は慈父母なり」の文章はその時書いたのであった。能戸得一君と佐竹政次郎君が尋ねて来て下さった。かくてお慈悲を喜びながら帰京したのは四月二十三日頃のことであった。そして母は帰国の後間もなく病気が出て、遂に五月三日、あたかも当日は、金森師の寺の講話を終り、帰宅して朝吹氏所有の聖徳太子の古画に二十句偈の八句と題のあるのを見出し、しきりに感歎していた時、母の病篤しとの報せに接した次第であった。嗚呼今年は色々と善知識のお教化を喜ばせていただく宿因まことにきわみのないことである。南無阿弥陀仏。

路

自己のすがた

自己のすがたはなかなか見えるものではない。その見えるとおもうのは、多くは作り飾ったすがたであって、決して如実のすがたではない。私の如実の姿はつねに何物かの後にかくれている。私は自己を美しく妄想して、その美化せられたる自己の幻の中に傲慢の夢を食って居る。

少年時には私は自己を清く美しいものと信じて居た。如何なる場合にも人を信じ、自己の心をそのままにうちあげて、人の助言を求め、たとい人から裏切られても、その裏切られたことにさえ気がつかぬという有様であった。人生は私の心眼の前には天国の園そのままであった。

さりながら、失樂園はすべての人のさだめである。二十年、三十年、四十年と人生の行路をたどる間に、いつしか純真の心持は失われていった。私はひがみと疑いとをもって人生を見るようになった。如何なることが云われ、如何

○不取正覚は証文なり

金を貸すにも、貸した人が自分で証文を書いて握って居るのではやくにたたぬ。向うの証文でなければ間にあわぬ。弥陀の浄土へ往生するにも、こちらのころのうちにたすかる証拠をこしらえては間にあわぬ。仏の方から六字の証拠をこの方へ取りおくべし。

南無阿弥陀仏は、われらが往生の証拠なり。ながながの間、反故にして居りました、勿体なきこととあやまりて、お念仏もうすころは、たのむ一念なり。

○凡夫の慈悲

美濃の励蔵云く。我国に興福寺という魚を捕る道具あり、寒中などに細長く中を空にして、麦藁にて巻きたるものにて、それを水中に沈めて置けば、魚はその寒さ凌がんとて、悉く入るのを丘に引きあげて魚をとるなり。

これはもと興福寺の大徳、魚をあわれんで寒を凌がしめんために考えこしらえたものなり。もとは慈悲より作りたれども、後には殺生のはじめをひらけり。凡夫の慈悲は、末とおらぬものなり。

福島政雄

なることが行われるときにおいても、私はそれをすなおに受取ることが出来ないようになった。私はつまらぬ猜疑（さいぎ）の心をもって人生を見るようになった。時としては、人生はすべて陥穽（かんせい）だらけであるといふころさえ起した。

元来が孤独性で、非社交的である私は、他人とうまく接触交際して行くことが出来ない。私はひとりごと出来る、一人対一人の対話ならばまだしも出来る。しかし三人以上の集りとなれば、私は全く駄目である。皆の心をよくまとめるような座談をすることは、私には出来ない。したがって、会議などに列席して居るときも沈黙して居ることが多い。うまく機会をとらえて発言することが出来ないのである。

しかし一方においてこの十余年の長い間、講演などに多く引出されてばかり居た私は、講演のときばかりは沈黙を破らざるを得なかった。次第に私は講演することに慣れた。

そして本来が感情的である私は、諄々と説いて行くことは出来ない。熱してこれを談じ、直に人の肺肝にせまりたいという心持を大いに持っている。

それで孤独性で非社交的でありながら、人間に対して大いに求めるところが私にはある。これは確かに性格上の矛盾である。私ほど人間に対して貪りを持つ者は少ないかも知れぬ。私は相手の魂に触れなければ、人と話をしたような気がしない。私は実にこの上もない煩惱性の人間である。この性格が私をして人生に対する悩みを深からしめるのである。あつさりとして風月を談じ、世間話をして交際して行くというのが、実際の法であろうが、私にはそれが出来ない。従って私は始終人と魂の触れないことを考えて淋しがつて居るのである。

素直に人生を見ることが出来ないようになった私が、最後に落着いて行くところは宗教の世界である。その宗教の世界というのは、絶対無限の親心のまことの世界であり、私の魂はその親心のまことに潤おされてひがみを直され、疑いを融かされて行くのである。

故に宗教の力は私の生命の根底に働いている。この宗教にはわかには鮮かな生活の革命となつて現われるようなものではない。空気のようなものであり、日の光のようなものである。或はまた米の飯のようなものである。味なきに味驚き、そこに久遠^{キウエン}の我執の自分の姿を見る。即ち實際問題を縁として私は自己の姿に目覚めて行く。この自覚こそは大悲の親心の心光裡の自覚であり、それはやがて私の生命の根源を潤して、私は自己の性格の偏執をも唯この親心にうるおわされて、静かに人生に立つて行くべきことを行つて行く。凡夫としての私の生活はこれに支えられて永却に到るのである。(昭和九・七・九日)

開けゆく心

此頃私は自分の生命の底に、静かに無理なく様々の芽ばえが出て来る感じがする。それは宗教の宗派にもとらえられず、学問の学派にも囚われぬという感じである。もとより私の生命が、祖聖親鸞を通じて釈尊の教によつて救われて居るといふ事実は変らぬ事実である。併し私は所謂親鸞主義を振りかざすという気持はない。私は祖聖親鸞を私の律法主義の拠りどころとしようとする気はない。

学問に至つては尚更の事である。私はプラトンを讀んだ、ペスタロッチを研究した。併し私はプラトン学派であるとも思わないし、ペスタロッチ主義者であるとも思わぬ。私はこの人生をそんな窮屈なものにしたくない。

或る調子に固つて、是ばかりが学問であると考えること

があり、平凡な生活を平凡につづけさせて行く生命の泉である。

この宗教の世界において、私には始めて自己の姿が見えて来る。光に照らされて自己の如実のすがたが見えて来るのである。親心のまことは、私がひがめばひがむほど私をあわれみたまう。その大悲の胸にいだかれて、私は煩惱の自己の姿をそのままに見せつけられるのである。併し見せつけられて徒らにその煩惱に悲泣するのではない。大悲の懐の中にしみじみと涙するのである。

その涙は忘恩背徳の私が摂取せられて行く涙である。この世の中で様々の御恩を受けて居りながら御恩を思わず、自分が生い立ったのも、生きて行くのも、学問をするのも、子を育てるのも、様々の御恩の力、殊にその根本をなす広大なる親心の御恩によるものであるものを、それを覚りもせず、他人の忘恩を責めて自己の背恩に気づかず、飽迄も自己の正善を主張しようとする私の心、そこに私の根本我執があり、根源の阿頼耶の無明の暗がある。久遠劫来の迷執のすがたこそは私のすがたであり、それは、如何なる相對の努力修養によつてもよくならぬ根本の病める魂のすがたである。

この姿は私が一時に全分を見ることの出来ない姿である。私は生活上の實際問題に当面する時、背恩の自己の有様に

は学者の偏屈というものである。洋々たる心がなくて、人とへだてを造ることばかりを仕事として居る。私なども元来は狭い心の人間であるから、どうも偏屈になり易い。自ら戒めねばならぬことと思つて居る。

併しこの頃の私の心の中の醗酵(はっこう)ともいふべき有様は、自分ながら非常に嬉しい。大きく云えば、人類の全文化は私のために開けておるといふような感じである。数年前に、私の心の中に乱れていたような西洋排斥の気持も今は消えた。もとより西洋だけに心酔して居るといふような調子には賛成出来ないが、日本主義だ、日本精神だと云つて、無暗に西洋を排撃するといふ調子にも賛成できない。文化民族としての我が国民思想の本流は常に世界の文化を摂取融化してこれを自家薬籠中のものとするところに存する。この日本民族としての心持が、今の私には次第にはつきりと開けて来ることを感ずるのである。長い間私の心は一種の囚われた状態にあった。信仰は学問に或る色彩を与えるというようなことを一種の囚われ心から考えていた。したがつてそこから自分こそは生命ある学問をするなどという烈しい傲慢心を起して居た。この囚われ心が今の私には次第に融かされておることを感ずる。

その最初の縁は一昨年夏、法隆寺において八日間、法華經の講義を聞いたことにある。私は今から二十四、五年

前まだ大学生であった頃、始めて法華經を通読し、しかも三回これを繰り返してその精神に触れたと思っていたが、未だ触れたのではなかった。二十余年の間私の精神は法華經に對して眠って居た。それが法隆寺において開け始めたのである。一昨年以來一乘法の精神というものが次第に私の生命にしみ込んで来た。もとより私の狭く小さい精神が法華一乘の広大なる精神となったということではない。法華一乘の精神が私の狭い精神をよびさまし、私は我が生命の狭小であることを今更のように感じたのである。それと同時に、わが日本民族は一乘法の精神に生きて来たものであるということが、はつきりとなったのである。

一乘法の精神はすべてを生かす精神である。すべてを撰取る精神である。それは覺者たる仏陀の大精神である。私はこの仏陀の精神に撰取せられて行くのである。同時にすべては一乘法の顕現である。すべての教は私の前に尊嚴である。私の狭い心が他人の世界を誹っている時、一乘法の精神はその他人の世界をも撰取る。私は時として自己の誹謗を縁として自己に目ざめる。誹謗の衆生としての私が撰取せられて行くのである。

この頃私は久し振りに日蓮上人の御遺文(ごるもん)をひろげて読んだ。そこには念仏無間という言葉が繰り返され、法然上人のことを悪しざまに言ったりしてある。併し

菅瀬芳英和上

菅瀬芳英和上には私は三回しかお会いしなかった。初めは大学仏教青年会に木辺法主の法話を聴きに参った時に、終りは原町土曜会の集いの席で、そして、中は同じ島地大等先生の御宅に御喪のあった際のこと、この時の事は私の生涯を導いてくださった教訓として今に感動を覚えしめられる。これを私の旧著「信仰と生活」からそのままを転載するのをお許しいただきたい。ちなみに記す、この文中の若き母君とは島地先生令室の篤照院様であり、母君とは寿松院様、友は「荀子の認識論」を稿して恩賜の銀時計に飾られ、輝かしい将来を望まれながら、不幸、短命にして逝った千原円一学士であって、稚き御児、法雨童子法磨様の御骨を日暮里からお迎えした時の事である。

念 仏

——おもいでの記事——

もう十年も昔のことになりました、秋の陽の晴れた午后

私はこの日蓮上人は法然上人をほんとに知らなかった人であると思う。念仏無間というはむしろ時勢を憤る声であつたらうとおもふ。さような教義上の叫びより以外に、日蓮上人には人間としてなつかしい所がある。祖聖親鸞に通う心持がある。それを私は感ずるのである。

一切の世界は私の前に尊き教として開かれる。私は順逆様々の縁によってその教を示されて行く。そこには永にとざされた私の心が、春先に融かされて行く不可思議の趣があるのである。

昭和一〇・四・一八日

京都市 山村信子

御名ここにありて雑煮のめでたさよ

穢身持てど 春陽はわれにおしみなく

かかる身も 生くる場を得て 露のとう

芽ぶく大地 わが業身も 生かし得て

白 井 成 允

のことでした。

私は一人の親友とともに或る若き母君の御伴をして、その母君の稚き御児の御遺骨を火葬場からお迎えもうして、そのお宅に帰ってきました。

御内仏様のお側に御骨函を安んじ香華をたむけたとき涙が流れました。その母君と母君の御老母君とははげしくいつまでもいつまでもお泣きになりました。

その座には私共の他に一人の御僧がおくやみに来ておられました。その方は断えずお念仏を称えておられました。突然このお二人に向つてこう申されました。

「泣くがいい、泣きたいだけ泣いていなさい。泣けばいくら悲しみのやり場もあろう。泣くより他に悲しみをはらすことも出来なからう。お泣き、心ゆくまでお泣きなさい。けれどな、あなたがたの涙はじきに乾いてしまふ。もうじきに泣けなくなつてしまふぞ、薄情だけれどな。それで、それを見抜いてくださる親様の御涙は

乾くときがないのだ、いつまでも私達のために泣いてく
ださるのだ。だからその親様の涙を想ってお念仏もうし
なさいや。

せいぜいお念仏もうすのだ、泣きたかったらお念仏も
うす、泣けなくなったらやはりお念仏もうす、お念仏も
うしなさいや。

そんなにしてお念仏もうすのは自力の念仏だからいけ
ない、などと理屈を言うのじゃないぞ。自力の念仏だと云
われても何でもよろしい、ただお念仏もうさせて参ら
してくださる親様の御涙なのだから、そのままでお念仏
もうすのだ。それが何時の間にか他力のお念仏であると知
らされてくるから。

お念仏もうしなさい。凡夫の涙ははかないから親様の涙
に帰らせていただくばかりでな。南無阿弥陀仏々々々」
御僧はこう云ってお念仏を高らかに称えておられました。
次に、御座敷の床間に蓮如上人御筆の正信偈の御句が掲げ
られてありました。

如来所以興出世 唯説弥陀本願海

これを眺めておられた御僧は私と友とに向ってこう申さ
れました。

「釈迦牟尼仏がこの娑婆世界にお生れくださったのは何
の目的であるかとなれば、他の目的なのではない。ただ

「安樂集にいわく。

真言を採り集めて、往益を助修せしむ。いかんとなれば
前に生ぜんものは後をみちびき、後に生ぜんものは前を
とぶらい、連続無窮（むぐう）にして、ねがわくば休止
せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがための
故なり」（本典化卷一三七章）
南無阿弥陀仏、々々々々々々

大正十五年三月二十四日記

照井寿次郎氏の遺書

此に掲げるのは盛岡市の願教寺に蔵せられる故照井氏の
遺書である。明治四十四年に書かれたものである。

訣別の辞

諸君よ、過去幾年の間、就中病床における五十日間、終
始変らざる親切を以て余を愛してくれた諸君よ。

余は今ここに諸君と永訣せざるべからざる時に到
達せり。許せ諸君。余は両親の懇命黙し難く上京治療を受
くべきも終に生くべからざるを知れり。夜半灯火に対して
独り目さむる時、感慨無量、不覚の涙潜潜として降る。こ
こに疲腕を呵して一言訣別の辞をかく。

大命一度凡愚の身に下りて余は今諸君に先立ちて浄土に

阿弥陀如来の御本願をお説きくださるうとの御思召であ
らせられた。

それなら私達がこの世に生れたのは何の目的であるか。
これがわからなければ生きた甲斐が無いぞ。それは、唯
説ではなくて、唯聴弥陀本願海なのだ、ただ阿弥陀様の
御本願を聴くためだ、御本願をお聴かせにあずかるため
だ。この一事がはつきりしていないと、その他のこと一
切駄目だぞ。あなた方が学問をしようとならうと、
みなそらごとたわごとにと止まってしまふぞ。

唯聴弥陀本願海

歎異抄にも、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろ
ずのこと、みなもと、そらごと、たわごと、まことある
ことなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします、と
いう言葉がある。念仏させてお浄土に参らせてくださる
うという御本願をお聴きするのだ。幸お念仏もうしなさい
や。南無阿弥陀仏、々々々々々々」

友と私とは涙しながらお念仏もうしました。その時から十
年も過ぎていていでしょう。その間に友も逝きました。その
若かりし母君も逝かれました。そしてその僧も逝かれまし
た——病弱にして何時逝くかわからない身がこうして今も
生を保ちそのかみのことを想い出しています。その御僧か
ら耳に聞き伝えている聖語をこう記しております。

行かなん。この世に出でて二十五年、顧みれば只これ一睡
の夢、一も心に止まるものなし。余はたとえ今生命を延べ
て人生五十の天寿をつくすとするもまた余る二十五年を夢
の如く繰り返すのみ。

余は無能底下の一凡夫なり。嚴肅なる死の前に立てる時
欺かざる我は戦慄せり恐怖せり、一度は遺族を思い泣け
り、二度は生のみじかきに哭せり、更に三度此世のはなれ
難く恋しきに泣けり。

されど諸君よ。更に思を進めて一念如来大悲の恩徳に及
ぶ時、ついに余は諸君に先んじて浄土の莊嚴に安住するを
得る光榮を思い心落居す。現世においては最早諸君と相
見る能わざるべし。只再会は浄土に於てせん。若し万一諸
君の一人が何物かの機会によりて余を思い出すことあらば
只それ、南無阿弥陀仏と唱えくれられよ。余浄土にありて
結縁の喜びを共にせん。こは余が諸君に対する最後の依頼
なり。

両眼半ば盲して筆意の如く走らず、一言心の存する所を
告げて永訣の辞となす。最後に諸君の余を愛しくれたる熱
烈なる慈愛を衷心より感謝して止む

明治四十四年五月三十日認む

二十有五歳 照井寿次郎

「聞法録」求道体感記よりいたたく

御一代記聞書抄(続五)

井上善右工門

蓮如上人、或ひは人に御酒をも下され物をも下されて、斯様の事ども有難く存せさせ近づけさせられ候ふて、仏法を御聞かせ候。されば斯様に物を下され候ふ事も信をとらせらるべき為と思召せば報謝と思召し候ふ由仰せられ候ふと。(第二一二条)

一

仏が衆生を撰取される道を菩薩が行じられる場合、それが四摂法として示されています。法蔵菩薩の四十八願も四摂法を根本として展開されたものといえましょう。四摂法とは一切衆生を撰取する四つの大行という意で、その具体的な活動は布施・愛語・利行・同事の四つであります。布施とはまことに与えること、愛語とは慈悲より流出する言葉、利行とは真実の利地成就、同事とは衆生に同化して撰取の行が実践されることです。いづれも利他一如から起る活動

でありますが、布施も愛語も利行も、みんな同事の行を通じて成就されるという関係にあります。如来の方便も同事から現われます。如来の真実そのものがびつたりと衆生の宜しきになつて働かれるのが方便であり、これを善巧方便といわれます。そもそも如来とは、決して独り輝く天上の月ではありません。聖徳太子は『維摩経義疏』に「大悲息むことなく機に随つて化を施す。則ち衆生の在るところ至らざる所なし……如来は本、己が土なし、唯だ所化の衆生を取つて以て仏土と為す」と述べておられます。即ち如来は衆生を離れたまわず、衆生のあるところ如来がましますのであり、衆生を撰め取るところが即ち仏土であつて、如来固有の仏土が本来独りあるのではないとの意であります。如来と衆生のかかる関係を思うとき、同事の行というところがいよいよ深く味わわれます。如来は常に衆生と一つになつて衆生に同じて下さるのです。親が子を慈み育てるとき、

親は大人であることを捨てて子供と一つになります。親がアーンと口を開いてみせるから子が口を開く、その口へ栄養を与えて身を育てる。子供と融けて遊んで、遊びながら心を養う。如来の大慈悲は同事の働きをもって衆生を撰取されるのです。その大悲によって念仏申す身となつた人には、また自然にその同事の徳が伝わるのであります。

二

本条では蓮如上人が御酒を下され、物を下されるお心が仰がれています。二九五条には「御門徒衆上落候えば前々住上人仰せられ候。寒天には御酒等のカンをよくせられて、路次の寒さをも忘れ候ふ様にと仰せられ候……」とあります。また一一七条には「おかしき事態(わざ)をもさせられ、仏法に退屈仕り候ふ者の心をもくつろげその気をも失はして、またあたらしく法を仰せられ候。誠に善巧方便ありがたき事なり」とも述べられています。これを現代人は上手な門徒の扱いふりと考える人があるかも知れませんが、手段や技巧は末徹るものではありません。また御苦勞の御経験があつての思いやりと見ることは、間違いでないとしても、ただそれだけでは上人のお心の底を汲むものではありません。そこには更に深く上人を通じて如来の同事の悲

心が動いていることを感じざるをえないのです。御一代聞書を拝読していると、上人と御門徒との関係が如何に法において、念仏において、結ばれていたかがうかがわれます。空善日記には、「仰せ、に我は門徒にもたれたり、ひとえに門徒にやしなはるるなり。聖人の仰せには弟子一人もまたずと、ただとも同行なり」とあり、聞書二四六条には、「法敬と我とは兄弟よと仰せられ候。法敬申され候ふ、是は冥加もなき御事と申され候。蓮如上人仰せられ候、信を獲つれば先に生るる者は兄、後に生るる者は弟よ、法敬とは兄弟よと仰せられ候……」と語られています。今日の状態と思ひ合はされて感慨なきをえませぬ。

本条に「されば斯様に物を下され候ふ事も信をとらせらるべきため……」とあるのをみると、紙切の落ちてあるのをも頂かれた上人が、門徒の信のためには総てをささげられたお心が偲ばれます。「まことに一人なりとも信をとるべきならば身命をすてよ、それはすたらぬぞと仰せられ候」(一一四條)とあります。如来の仏徳が大悲伝普化の活動として流出し、それが同事の大行となつて働く。念仏は本願に乗托することであり、本願に随順することは本願の大

三

悲と同一方向に進ましめられることであります。それが即ち常行大悲の徳に外ならぬのでありましよう。その徳と共にほとぼしる蓮如上人のお心をありありと次の各々は語っています。

秀存師語録

商売片手に

在家には信をうる人多く、出家には少なし。その故は、在家は、我商売やめて、我身が助かりたいばかりにきく故に信をうるなり。

出家は、ききてそれを我商売のためにするなり。所謂、商売片手にきく故に信を得ぬなり。

不可言

大車云く。ある信者云く。御安心のおいわれは初めは口に云われず、それより云われるようになり、また云われぬようになるなり。云わぬようになるは余り広大なる事が分るからであつて唯不思議と信するより外なきが故なり。

思いつまらぬと思いつまる

或人云く。どうも私は吾身のわろきいたずらがおもいつまりませぬと。

答えて曰く。いたずら者がいたずら者と思いつまらぬなれば、それでいよいよ思いつまるなり。いたずら者でありながら、それがいたずらものと思いつめられぬようないたずら者と思いつむべし。

十二月十二日

自照日誌抄(16)

——ことしもお宜しく——

あけましてお芽出とうございます。本年も、いや本年は特に宜しくお願い申しあげます。

○ わたしは今、三十年前のシベリア時代に見た二つの夢を想い起しております。

その一つは、四月二十九日、今でいえば天皇誕生日。俘虜時代はまだ天長節とっております。その日の夜の夢のことです。

そのころ私は、夜も昼も、心中はげしく天皇を責め罵つておりました。というのも、幾百万の壮丁・若人を、天皇の名のもとに死地に追いやり、その両親と妻子を、悲歎のドン底におとしいれ、そして無辜(むこ)の民を今もなお塗炭の苦しみに、そしてわれらは今、シベリアに捕われの身となっている、天皇さまよ、これをどうして下さるのかという詰問でありました。恨みでありました。

西元宗助

ところがその天長節の夜のことです。夢に一人の顔面蒼白のおん方が、ありありと目の前に現われたのです。それは苦悶の象徴ともいべきなんともいえぬおん顔で、わたしはジツと見つめていたのですが、そのうちにハツといたしました。天皇さまなのです。ともかく天皇さまだったのです。

目のさめたのは暁(あかつき)の午前四時か五時ごろだったでしょう。わたしは、この時以来、目からウロコがとれたように、天皇を激しくお責めする気持は全然なくなりました。そしてわが身の業報ということ、自分の責任ということ、心中深く感じさせられるようになりました。

もう一つの夢、それは亡き父についてのこと。

わたしは昭和四年に、この世を去った父に対して、限りなく親不孝でありました。わたしの想念に浮かぶ父の顔はまことに淋しく、殊に夢にみる父のおん顔は哀愁にみちて

いて、それは私にとって切ない限りでありました。(今にして思えば、青年期、わたしが多少、本気になつて聞法し求道しはじめましたのは、この哀愁にみちた父の悲心によるものであることを省みることでありませう。)

ところで入ソ二年目の冬、私は栄養失調に陥つて骨と皮になり、ついに特別病棟に移されたのですが、ある夜のこゝと。夢のなかで父上にあつたのです。ところが、父のそのおん姿がいつのまにか大悲の如来となり給ひ、じつと、この私が合掌されているのであります。夜明けに夢さめてあまりのことにただお念仏申したことです。これは私にとつてまことに深い深い想出であります。

わたしごとの小夢を申しあげて、いささか気がひけますが、実は聖人報恩講の時節にあつたつて、聖人ご生涯の御夢告をあれこれと想ひ念じていたのでございます。

シエム△ そういたしますと、聖人御齡二十九才の建仁三年四月五日の六角堂ご参籠のときの夢告も、御齡八十四、五才の康元二年二月九日の「弥陀の本願信すべし」の夢告も、「夜寅時」とあるのであります。

それで、夜寅(よとら)の時というのは、今の時刻でいへば何時にあたるのであらうかと辞書をひいて調べてみますと、なんと早朝の午前四時前後のことです。一瞬、

戸迷つたのでありますが、前記のように自分の夢のことを追想してみても、夢からさめますのが午前四時前後というこゝとは、ごく自然のことと合点のいつたことでありました。以上、聖人の御恩徳を讃え、慚愧いたしつゝ謹記し奉る。

「慈光」誌のお蔭で、九十才になられるロサンゼルス清水しげる夫人とも、スタクトンの浅井静香さんにも、それから、あちこちの御同行の方々とも一層、ご縁の深められますこと、まことに嬉しいこととあります。無相さんはじめ、皆さま、ことしもお達者で。最後に例によつて、榎本榮一翁の詩をひとつ。

山の灯

ぐるりの闇が深いので

あの遠い山の灯が

ポツンと一つ見えまする

念仏詩抄

悪知識

香師おおせに

甘(あま)く語るを

悪知識という

わが好むことを言うて

くれる人には

つとめて用心せよ

嫌(きら)いなものに

食いすぐすという

心配はない”

香師||香樹院徳龍師

木村無相

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ツリバリ

香師おおせに

念仏申しても

往生決定の念なければ

また迷うなり

迷えども

ツリバリ吞(の)める

魚のごとくなりとの

おたとえなり”

甘いものにア리가たがる
甘い知識に
甘い同行がたかる
糖尿病のご用心——

このツリバリは
お浄土から――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

お念仏

香師おおせに

“忘れるごとに

忘れておくれぬ

お慈悲を思つて

念仏すべし”

忘れるごとに

忘れておくれぬ

お慈悲があらわれ

呼びかけたまう

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

それ知らぬゆえ

香師おおせに

“ナニゴトも

過去よりの業と思わば

針のムシロにすわれと

言われても

ご恩にむかえば

イヤと云われぬこの身なり

それ知らぬゆえ

不足ばかり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

その涙までも売る

香師おおせに

“お聖教拝見して

涙のこぼるるような

ことがあつても

その涙までも売る

潤色（じゆんしょく）

するような心になる――”

とても地獄は一定

すみかぞかし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

本願の不思議

香師おおせに

“聞くばかりで

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

それ知らぬゆえ

香師おおせに

“ナニゴトも

過去よりの業と思わば

針のムシロにすわれと

言われても

ご恩にむかえば

イヤと云われぬこの身なり

それ知らぬゆえ

不足ばかり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

仏になることに

ウタガイはるるは

本願の不思議なり”

本願の不思議

本願の不思議

ナムアミダブツの

不思議なり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

法信抄

十二月六日

慈光誌、千九百部も出るとのこと、それだけ世間が要求

しているのをごさいますねエ。

オタガイさまに「雪見にころぶところまで」でございま

す。どころんでも雪の上、でして。

ナムアミダブツ ナムアミダブツ 合掌

仏願の生起を聞く

花田正夫

紀元前四九六年にギリシヤに生れたソクラテスが、「汝自身を知れ」と提唱し、彼自身は「我は何事も知らざることを知れり」との自覚に達していた。さすが世界の四聖と讃えられるだけあって、彼は真の智者である、だからこそのるほど頭がさがる稲穂かな、と無智な者と頭を下げている。

然し我等凡愚の身は、自分で自身を知るといふことは不可能で、自分の周囲を注意して知ろうとするが、自分をいつもとおりおとしている。ドイツの詩人ゲーテは「自分自身を知れとは、昔から繰返えして今日でもよく人の云うことだが、さて不思議なことには誰一人その言葉に従った者もなく、またこれからも誰一人も従いそうにない」と云っている。ここにその大切さは誰しも認めるけれど、その実行は不可能であると、足が大地を離れ得ないで、徒らに理想の天空をあこがれる外ない身を告白している。

十五世紀に出られた蓮如上人は「人の悪きことはよくよ

く見ゆるなり、わが身の悪きことは覚えざるなり」とも、また「誰のともがらも我は悪きと思うもの、一人としてもあるべからず。これしかしながら聖人の御罰をこうむりたるすがたなり。これによりて、一人ずつも心中をひるがえさずば、ながき世、泥梨(ぢごく)にふかく沈むべきものなり。これというも何事ぞなれば、真実に仏法の底を知らざる故なり」と、手を執るようにして誠められている。

ここで「聖人の御罰をこうむる」と云われたのは、何も聖人が罰をあたえられる人ではないが、聖人がねんごろにお勧め下さる実意を聞きおとしている、そのために仏法の真意も頂けないでいる事へのきびしいお誡めである。

おもうに聖人は「如来の教法われも信じ、人にも教え聞かむるのみ」と仰言るように、弥陀仏の本願一つを御自身に、親鸞一人がためなりけり、と信受せられると共に、九十年の御生涯を貫ぬいて筆に口にこれ一つをお勧め下さったのである。

さて、弥陀仏の本願のおこりは誰のために御辛勞して下さるかを聞きひらく時、はじめて自己の姿も照し出されるのである。あだかも親は子になくてはならぬことのために昼夜に苦勞するよう、に、如来はわれら衆生になくてはならぬことの為に本願を建立して下さるのである。前にも述べたように自分で自身を知ることとは出来ないが、本願を聞きまつるとき、仏の御目に映る私共の実体を知らされ、それはその時だけの一時的自己でなく遠い昔から現に今も続き、またこれからさきもそれから出られない、過去・現在・未来にわたる自分の姿を照し出されるのである。聖人が生涯、愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり、と悲歎せられたのが、心光照護の下に見出された御自身の姿である。さらに善導大師が「自身は現に罪悪生死の凡夫、曠却よりこのかた常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと深信す」とあるのも規を一つにされたものである。

本願の親心のまことが身にしんで、はじめて自己の正体が見えはじめることについて卑近な例をあげよう。有名な姥捨山の物語に、奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ、親の身すてて帰る子のため、とある。老いた親を山に捨てて行く途中、手にふれると枝を折って道しるべをする親を見て、また山から帰ろうと枝折りしていると子は邪見にあつか

う。やがて山奥に親を捨てて帰ろうとした時「一寸待っておくれ、母はここで死なしてもらうが、若いお前が道に迷わぬようにと思つて枝折りをしておいた、無事に帰っておくれ」との一言に、あの枝折りは親を捨てる自分のためにして下さったのか!と驚き、邪見をわびて再び家に帰ったと伝えられている。五分五分超えた親心にふれて、利己一点張りの不幸の身が知れはじめたのである。

最近の出来事であるが、沢山の婦女子を乱暴して殺した大久保清が、警察に捕えられた時「自分のような悪人は早く死刑にせよ」と云つて、犯罪に対して口を閉ざしてしまつた。そうした時、彼の両親が面会に来た。母は清の顔を見るなり泣き崩れてしまい、父は「清、達者か!」と言つて次の言葉は出せなかつた。一方清は自分の罪の言い訳ばかりして「世間の女がすぎだらけである。自分をそだてたがわるかつた時、父が「清、お前がどんなに悪いことをしていようと、親じやから決して捨てはしないぞ」との一言に、清は両眼に一杯の涙をうかべてうなだれた。その次の日には「警察はずるい、親を呼んで自分を困らせた」と強がり云つていたが、その翌日からポツポツと罪を告白しはじめた、との報道があつた。これを読んで、私なりに彼の心を推察した。清は沢山の婦女子を犯して殺害したの

で、自分のような者は、世間から憎まれ、親といえども見捨ててしまふであらうと、文字通り孤立無援であると一切の人をへだて、かたくなに自分の心を閉じていたのであるが、思いもかけず、親の涙と、どうあらうとも親じやから捨てはせぬぞの一言に、親心の真実にふれ、ここに堅く閉じた彼の心もほぐれはじめたのであった。

私共も、仏の大慈悲、若し生れずば、我正覚をとらじ」とのお呆れのないおまことを聞かされるにつけて、こゝまで辛勞して下さるのも、煩惱具足の身とて、生死の苦悔をはなれることの出来ない身をかねてからしろしめされて、諸神・諸菩薩にも捨てられる私共のために建立して下さった本願でましましたかと、且つ愧じ、且つ謝しまつるばかりである。

ここで思い出されるままに、太陽と風との力競べの寓話を誌さう。或日風が太陽に向つて、力競べしようとして、外套を着ている旅人を見つて、あの外套を脱がして見ようと、先づ風が強く旅人に吹きつけた。旅人は、オオ寒むと云つて、しっかりと外套をおさえた。風はいよいよ強く吹きつけたけれど、旅人はころびそうになつても外套を放さなかつた。今度は太陽が代つて、暖かい光を放つと、ああ温いと云つて外套から手を放し、しばらくすると、こんなものを着ておれぬと外套を脱いだという話である。私共の

心も、悪い悪いと外から責められたのでは、心の扉をしつかり閉じるが、理解あるあたたかいところにふれるで、はじめて着物を脱いで、自分の正体が見えはじめるのである。四十八願の第一に地獄・餓鬼・畜生無き国をつくらんとあるのは、私が朝から晩まで貪・瞋・痴の煩惱をまき散らしているためである。

他心知通の願は、親子でありなが、親心子知らずである身、まして余の人の心も知る力もない、飽くことのない利己の一念に終始する身を悲愍されるからである。

触光柔軟の願も、ことに私のようにすぐ怒り腹立つ身故に発起された悲願である。

光明無量の願は、人生到るところで煩惱に縛られてやりそこないがやまぬ身だから、いつも眼をはなさず護り抜いて下さるうためである。

寿命無量の願は、何時まで経つてもさとりのひらけぬ、ひとり立ちの出来ぬ身だから、何時々々までも手を執つて浄土に導き入れて下さるうためである。

還相廻向の願も、私自身若く元氣な頃は、死を遠くにおいて、この願も軽く聞いて、買物をするとき景品がつくように、信心を獲ると自然についてくるもの位に見ていたが、老いと病の身になつて、自分のいのちの短かき、そして力の微弱である身とひしひしと知らされるにつけて、い

そぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦に沈めりとも、まず有縁を度すべきなり、の歎異抄五章にとかれた還相の利益を聞くにつけ、この仏願がなかつたら、有縁のあらゆる人々と永遠の別れとなり、死んでも死にきれない悲歎におちねばならぬと、念仏にかえらされはじめている。

十八願の至心信樂の願も、虚仮不実の身、邪見無信にして真実の信樂の無い身を悲憐されての、一念一刹那も清浄ならざることなき御修行、点滴の岩をも穿つ如来のたゆみなき大悲心にもようされて、光明の広海に浮かばせて下さるうためである。そこに石瓦礫に等しい身が知らされる。

願わくば瞑目一番、一一の願、衆生のため、とある仏願を仰いで、こうした御苦勞があるのは、仏の御目にこうして下さらなければ救われないと私共の正体を見抜かれての上である、そこに仏眼にうつる私共の姿を省みさせていだいて居ります。聖人の常の仰せに

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」

とある。仏の本願をよくよく思索してみると、遠い昔から身にもつ罪業、そしてこれからさきもどうしてみよ

ない罪業の身を見抜いて下さった上の御苦勞でましたかとの聖人の仰せに導かれて浄土への旅をたどらせていただくばかりであります。

未来にすこしでもよくなれる身であれば、仏は本願をおこされるはずはありません、前述のように聖人が生涯愚禿々と仰言り、法然聖人が、十悪の法然、愚痴の法然房と常に仰言り、善導大師は、罪悪生死の凡夫、出離無縁の身と表白されたのも、本願の大悲を仰がれて、そこに仏の御目にうつる自己の姿をそのままに慚愧されたのであります

聖人の常の仰せ、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ、と、いつでも、どこでも、誰にでもくりかえしての御述懐を拝して、そこに御本願の発起されたおめあてが、そくばくの業を持ちける身、煩惱熾盛、罪業深重の私共をたすけて下さるうためでありましたかといよいよはつきりを知らせて下さるのであります。

昭和四十五年十二月中旬

あとがき

年頭を称名裡におよろこび申上げます。明治以来、十年おきに戦争がくりかえされた日本が、昭和二十年以降、三十五年間、ともかくも干戈を交えず、平和が続きました。然し、内外に問題は山積し、暗雲が低迷しているにつけて、法然・親鸞・道元・日蓮と輩出された当時の苦難の多い世相をしのばすには居られません。所詮は、真実の心よるべを一人一人が樹立しなければ、空しいさすらいに終らねばなりません。

「行に迷い信に惑い、心くらくさとりすくなく、悪重く障り多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉(つか)え、唯この信をあげめよ！」

「誠なるかなや、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して運慮することなかれ！」

と、聖人が全霊全身をあげられての御勧め、年頭にまず拝読し、恩徳の深きこと謝しまつることでありませう。

一月号には、近角、福島、白井の諸先生の信味を戴きました。近角先生は宗教、福

島先生は教育、白井先生は倫理学の上に、青色、黄色、白色と夫々の徳光を放って下さいました。

井上様はことに御多用続きの中に、同事の行について丁寧にお述べ下さいました。いつも我執に縛られている身が知らされ、かかる身にそそがれる大悲の御手を仰がせていただきました。

西元様は教育学を専攻され、現に京都産業大学で若い学徒と生活を共にしていられますが、各地の要請をうけられて、お忙しいお日常であります。午前四時頃について特記して下さいましたが、一日の疲れをやすめて、自然に目がさめる夜明け前の一時は、あたりの静寂に恵まれて、心の動きが自由活発で、心の糸のほぐれるのを覚えますことでもあります。これも老いて知る喜びの一つでしょうか。

木村さんは、和上死にベットを恵まれ、寝たきり老人の間では一番元氣な由であります。狭心症発作の前兆が毎日二、三度との由、歩行もイキが苦しいと聞き、この冬をどうか御無事にと祈念しております。それでも法談をしている時は、発作もおこらぬのは不思議とか、ありがたいことであります。

△御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午后一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、鬼頭康彦氏宅。市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新瑞橋、終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り、又は北山下車。
地下鉄、御器所通下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駆上町二ノ八八

印刷 坂部 光雄
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
電話八二二局七〇三七番

発行所 慈光社
振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七

慈光 第三十二卷 第一号 昭和五十五年
昭和二十四年 七月 二十三日

一月十五日発行(毎月一回・十五日発行)
日 第三種郵便物認可